あるんだ。それはね…11月の日曜日、淳の授業参観の案内が、学校からあったでしょう。…あのとき、淳はもう１通、先生からの手紙をあずかってきてたんだ。淳の書いた作文が北海道の代表に選ばれて、全国コンクールに出品されることになったので、参観日に、その作文を淳に読んでもらうって。先生からの手紙をお母さんに見せれば…むりして会社を休むのわかるから、淳、それを隠したんだ。そのこと友だちから聞いたものだから…ボク参観日に行ったんだ」「そう…そうだったの…それで…」「先生が、あなたは将来どんな人になりたいですか、という題で、全員に作文を書いてもらいましたところ、淳くんは１杯のかけそばという題で書いてくれました。これからその作文を読んでもらいますって。作文はね…お父さんが、交通事故で死んでしまい、たくさんの借金が残ったこと、お母さんが、朝早くから夜遅くまで働いていること、ボクが朝刊夕刊の配達に行っていることなど…ぜんぶ読みあげたんだ。そして12月31日の夜、３人で食べた１杯のかけそばがとてもおいしかったこと。…３人でたった１杯しか頼まないのに、おそばやのおじさんとおばさんは、ありがとうございました.／どうかよいお年を.／って大きな声をかけてくれたこと。その声は…負けるなよ.／がんばれよ.／生きるんだよ.／って言っているような気がしたって。それで淳は、大人になったら、お客さんに、がんばってね.／幸せにね.／って思いをこめて、ありがとうございました.／と言える日本一の、おそば屋さんになりますって、大きな声で読みあげたんだよ」カウンターの中で、聞き耳を立てていたはずの主人と女将の姿が見えない。カウンターの奥にしゃがみこんだ２人は、１本のタオルの端をたがいに引っぱりあうようにつかんで、こらえきれずあふれる涙を拭っていた。「作文を読み終わったとき、先生が、淳くんのお兄さんが、お母さんにかわって来てくださってますので、ここであいさつをしていただきましょうって…」「まぁ。それで、お兄ちゃんどうしたの」「突然、言われたので、初めは言葉が出なかったけど…みなさんいつも淳と仲よくしてくれてありがとう。…弟は毎日、夕飯のしたくをしています。それでクラブ活動の途中で帰るので、迷惑をかけていると思います。…あのとき…１杯のかけそばを頼んでくれた母の勇気を、忘れてはいけないと思います。…兄弟、力を合わせ、母を守って行きます。…これからも淳と仲よくしてくださいって言ったんだ」しんみりと、たがいに手を握ったり、笑い転げるようにして肩を叩きあったり、昨年までとは、打って変わった楽しげな年越しそばを食べ終え、300円を支払い「ごちそうさまでした」と深々と頭を下げて出て行く３人を主人と女将は、一年を締めくくる大きな声で、「ありがとうございました.／どうかよいお年を.／」と送り出した。また１年がすぎて―。北海亭では、夜の９時すぎから「予約席」の札を２番テーブルの上に置いて待ちに待ったが、あの母子３人は現れなかった。次の年も、さらに次の年も、２番テーブルを空けて待ったが、３人は現れなかった。北海亭は商売繁盛のなかで、店内改装をすることになり、テーブルや椅子も新しくしたが、あの２番テーブルだけはそのまま残した。真新しいテーブルが並ぶなかで、一脚だけ古いテーブルが中央に置かれているのを不思議がる客に、主人と女将は「１杯のかけそば」のことを話し、このテーブルを見ては、自分たちの励みにしている。いつの日か、あの３人のお客さんが、来てくださるかも知れない、そのとき、このテーブルで迎えたい、と説明していた。その話が「幸せのテーブル」として、客から客へ伝わった。わざわざ遠くから訪ねてきて、そばを食べていく女学生がいた

り、そのテーブルが、空くのを待って注文する若いカップルがいたりで、なかなかの人気を呼んでいた。それからさらに、数年の歳月が流れた12月31日の夜のことである。北海亭には、同じ町内の商店会のメンバーで、家族同然のつきあいをしている仲間たちが、それぞれの店じまいを終え、集まってきていた。北海亭で年越しそばを食べた後、除夜の鐘の音を聞きながら、仲間とその家族がそろって近くの神社へ初もうでに行くのが、５、６年前からの恒例となっていた。この夜も、９時をすぎたころからいつもの仲間30人あまりが、酒や肴を手に次々と集まり、店内の雰囲気は盛りあがっていた。２番テーブルの由来を知っている仲間のことである。口にはしないが、おそらく、今年も空いたまま新年を迎えるであろう「大晦日10時すぎの予約席」をそっとしたまま窮屈な小上がり席に、さらに全員が少しずつ体をずらして、遅れてきた仲間を招き入れた。大売出しの話、海水浴でのエピソード、孫が生まれた話など、にぎやかさが頂点に達した10時半すぎ、入口の戸が開いた。幾人かの視線が入口に向けられたのを知り、全員が押し黙る。オーバーを手に、スーツを着た２人の青年が入ってきた。ほっとした、ため息と共ににぎやかさがもどる。女将が申しわけなさそうな顔で「あいにく満席なものですから」と断わろうとしたとき、和服姿の婦人が深々と頭を下げて入ってきて、２人の青年の間に立った。店内にいるすべての者が息をのんで聞き耳をてる。和服の婦人が静かに言った。「あのー…かけそば…３人前なのですが…よろしいでしょうか」それを聞いた女将の顔色が変わる。10数年の歳月を瞬時に押しのけ、あの日の若い母親と幼い２人の姿が、目の前の３人と重なる。オロオロしている女将に、青年の１人が言った。「私たちは14年前の大晦日の夜、母子３人で１人前のかけそばを注文した者です。あのときの、１杯のかけそばに励まされ、３人手を取り合って生き抜くことがきました。その後、母の実家があります滋賀県へ越しました。私は今年、医師の国家試験に合格しまして、京都の大学病院に小児科医の卵として勤めておりますが、年明け４月より、札幌の総合病院で勤務することになりました。その病院へのあいさつと、父のお墓への報告を兼ね、おそば屋さんにはなりませんでしたが、京都の銀行に勤める弟と相談をしまして、今までの人生の中で、最高のぜいたくを計画しました。…それは、大晦日に母と３人で、札幌の北海亭さんを訪ね、３人前のかけそばを頼むことでした」うなずきながら聞いていた女将と主人の目からドッと涙があふれでる。入口に近いテーブルに陣取っていた八百屋の大将が、そばを口に含んだまま聞いていたが、そのままゴクッと飲み込んで立ち上がり、「おいおい女将さん／何してんだよ／10年間この日のために用意して待ちに待った、大晦日10時すぎの予約席じゃないか、ご案内だよ／ご案内／」八百屋に肩をポンと叩かれ、気を取り直した女将は、「…ようこそ…さあどうぞ…お前さん／２番テーブルかけ三丁／」仏頂面を涙でぬらした主人、「あいよっ／かけ三丁／」期せずしてあがる歓声と拍手の店の外では、先ほどまでちらついていた雪も止み、新雪に跳ね返った窓明かりが照らしだす「北海亭」と書かれた暖簾を、ほんの一足早く吹く一睦月の風が揺らしていた。